教育研究会報告

専門実習から考える教職大学院のカリキュラム
—木村優先生をお迎えして—

徳永俊太
大学院連合教職実践研究科学校臨床力高度化系

１．2022 年度の教育研究会

2022 年度の教育研究会は、対面とテレビ会議システムを併用して開催された。対面での開催は、2019 年度以来となる。これまでの教育研究会と同様に、紫漣会の総会と講演が行われた。対面、オンラインとも多くの参加者があった。

今年度の教育研究会は、教職大学院の新しいカリキュラムを意識したテーマを設定して行われた。大学院連合教職実践研究科のカリキュラムは、2022 年度より同研究科学校臨床力高度化系に受け継がれることになった。カリキュラムの再編成に際して、実習に大きな変更が加えられた。これまで特定の時期に 3 週間、5 週間で行われていた学部卒院生の実習を短縮し、新たに毎週水曜日に行う実習を加えた。前者を集中実習、後者を水曜実習と呼称している。さらに、学部卒院生だけではなく、現職院生も実習を行うことになった。この新しい実習を構想する際に、福井大学の木村優先生にご助言をいただいており、その縁で教育研究会での講演が実現することとなった。講演に先立って、M1 院生は科目「現代社会と学校教育」の時間を使用して、木村先生の論文[1]を共有し、質問集を作成した。質問集は事前に木村先生にお渡しして、講演内で応答いただくことになった。

２．講演概要：「専門実習から考える教職大学院のカリキュラム～実践と研究をつなぐ～」

福井大学連合教職大学院は、授業研究・教職専門性開発コース、ミドルリーダー養成コース、学校改革マネジメントコースからなる。大学院のカリキュラムは、学校における実習と各系のプロジェクト学習・カリキュラム開発実践研究をコアにしてデザインされている。カリキュラムの運営は、大学教員によるチーム・ティーチングによって行われる。大きな特徴は、院生が実習を行う学校のリズムと院のカリキュラムが連動している点である。よって、実習校での実習に重きが置かれ、「実践の中の理論の生成」を目的とした「学校拠点方式」と呼ばれる方式が採用されている。例えば、授業研究・教職専門性開発コースでは、週 3 日もしくは 2 日の実習が 1 年間かけて行われている[2]。こうした実習の在り方を支えているのは、学校（拠点校・連携校）、教育委員会・教育研究所（センター）との協働連携である。

実習に対応して、大学では「週間カンファレンス」と「月間カンファレンス」が行われる。「週間カンファレンス」は、「授業研究・教職専門性開発コース院生（学部卒院生）が大学院教員を交えて 1 週間の学校での経験と学び（長期インターンシップ・学校拠点長期協働実践プ

ロジェクト・カリキュラム開発実践研究等）を記録にもとづき振り返り、各自の課題を把握し、解決にむけた実践を探る」ものである。各月には、「授業記録」、「道徳」、「長期的な実践を振り返るⅡ」といったテーマが割り振られ、大学院生と大学院教員による協働によって運営されている。この協働は学習コーディネーションと呼ばれている。一方で、「月間カンファレンス」は、「授業研究・教職専門性開発コース院生・ミドルリーダー養成コース・学校改革マネジメントコース院生（現職教員）が集まり、日々の実践と学校の展開を語り合うことで、教育改革の動向や学校・教師の協働文化を理解するとともに、次への展望を協働でひらく」ものである。その他にも、夏期・冬期集中講座やラウントテーブルなどが開催され、大学院の枠組みに収まらない学びの機会が提供されている。教職大学院の修了時に位置づけられているのが、「長期実践研究報告」である。これまでの授業と同様に「大学院における実践の省察／理論化／意味づけ」のために行われる。

福井大学教職大学院の実践は、大学内、福井県内だけでとどまらず、日本国内、日本国外においても展開されている。連携協力大学との実践、日本の様々な地域でのラウンドテーブルの開催、様々な国からの留学生の受け入れなどが行われている。

３．講演を終えて

対面とオンラインとの併用ということで、多くの参加者が議論に参加するために Google スライドを使用し、質問や感想をオンライン上に集約・共有した。講演の中で触れられなかった質問に関しては、木村先生がスライドを編集する形で応答いただいた。

今回の教育研究会の運営にあたった筆者（徳永）は、院生 2 名と一緒に、2023 年 2 月に福井大で行われたラウンドテーブルに参加したので、最後にその時の様子を追記しておきたい。このラウンドテーブルで開催されたポスターセッションでは、大学院生だけではなく、学校の教員、小学生から高校生までの子どもたち、留学生、本屋を運営する企業など、様々な人々の参加があった。院生が参加したグループセッションでは、大人と高校生が対等な立場で学校での学びについて議論する場が設けられていた。教職大学院が教師だけではなく様々な人々にとっての学びの場となる可能性を感じることができた。筆者が参加したグループセッションでは、「長期実践研究報告」を見せてもらうことができた。発表者が「畳みたい」と述べる分厚い冊子で、2 年間の学びの蓄積が見て取れた。2022 年度から実施している京都教育大学教職大学院の水曜実習において、院生は様々な経験をしている。この経験の蓄積を修了時にどう総括するのかが、私たち京都教育大学教職大学院学校臨床力高度化系の 2023 年度の課題になるだろう。

---

[1] 木村優、森﨑岳洋「福井大学教職大学院における『新たな学び』を展開する『学び続ける』教員の養成と支援―学部新卒学生の大学院における学修成果と教員採用後の成長過程の追跡―」『教書教育研究』第 7 巻、2014 年、pp.215-231。木村優「授業研究が実装する専門職としての教師の資本育成と学び合うコミュニティ成熟機能―授業研究の歴史的展開を踏まえた理論研究―」『教師教育研究』第 12 巻、2019 年、pp.3-11。

[2] 水曜実習は、こうした日常的に継続して行われる実習の在り方を参照している